
不思議の国の有栖騎士

かぼすパイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国の有栖騎士

【Zコード】

Z6076D

【作者名】

かぼすパイン

【あらすじ】

有栖は読書家の美少年。だけど本人は目立つ事なんて望んじゃあない。なんとなく適当に日々を過ごしてたら、いきなり図書館からお花畠に異世界旅行！そこは有栖主人公の物語の中だった！世話を焼かれ、放つておいて欲しいのに誰もが有栖を気に掛ける。何故なら主人公だから。ドロドロに甘やかされたかと思えばさあ魔方陣で戦え！長編ファンタジー

用意するものは魔法陣と鎧です

乾いた風が体をすうっと通り抜ける。
衣服など防寒という目的ではあまり意味のないものではないかと思え思えてしまつ。

それ程に、今日は一段と寒かつた。

いよいよ冬も本番か。

一番家から近かつたから。
そんな理由で難関高といわれる、この丘瑠斗高校オカルトを受験した僕だが、
取り上げて言う程頭がいいというわけではない。
のらりくらりと、面倒な事だけは避けて適当に生きてきた。
何事も中間がいいのだ。

良すきぎず、悪すきぎず。

なるべくなじ注目などされずこ、

「あ～おはよ～、今日ズッゴク寒いねえ」

人付き合つも程ほどこ、

「おはよ～、今日夕方から雪なんだってえ。あたしさあ
…」

それなのに、

「あー有栖アリス、お前今日放課後付き合つてくんね? ビーしてもお前連
れて来いって …」

どうして

こんな容姿に生まれてしまつたばかりに……！

名前も覚えていない、よおーく思い出してみればそりいえば見たことあるような顔だなあといった程度の認識しか持たないこいつらにー。何故朝から囮まれなければならぬ？

別に僕は金とか銀とか特殊な髪を持つわけでもない。

真つ黒な髪にこれまた真つ黒な目。普通だ。至つてふつう。

高めの身長に細くも全く筋肉がないと言つわけではない白い体。

ただ、髪の毛は長く、襟足を一つに束ね、前髪も目に掛かってしま

う長さなので左右に避けてある。

何故そこまでして髪を伸ばすのかといつとまた長い話になるからまたの機会としよう。

「おはよ。悪いけどさ、放課後は僕図書室に用があるんだ」

何だよ、愛想わりいなあなんて思われてもいけない、
だけど放課後の貴重な時間を割いてまで、こいつらに付き合つ事もない。

僕は適当な笑顔を振りまいて席に着く。

僕の姿を目に留めた何人かが話しかけにこいつとするが
だけど僕だって何も考えていないわけではない。

誰も僕に話しかけないままチャイムだけが鳴り響いた。

教室にはギリギリに入るようしている。

家が近い分、時間の調整も思いのままだ。

退屈だ。

退屈。

だけど僕は授業中に眠つたりなんてしない。

精々窓の外を眺めているか、じいっと時計と睨めっこしているかのどちらかだ。

休み時間は本を読んで過ごす。僕は読書家だ。

僕じゃない物語の中で人生を生きる。ページを捲る音、紙のにおい。誰が話しかけてきても大抵は無視してしまう。

これは問題ない。事前に僕は本に集中すると周りの声が聞こえないんだと言つてある。広めたつもりはない。広まっていたのだ。これを利用しないでどうする。

退屈な授業を終え、僕は放課後を迎える。

この放課後の為に僕は学校に来ているといつても過言ではない。
ここ、丘瑠斗^{オカルト}高では、放課後に限つて図書館が開放される。

校舎とは別に建てられた図書館は、高い高い天井に向かつてぐんぐんと伸びるようにして階段が続いており、その階段脇に本棚があるのだ。

だから、外観は物凄く縦長い。

本の数はなんとどの高校よりも多いらしい。

これは僕が入学してから知ったことだ。

「思つたより、きつい、な……」

今日、僕は最上部まで行つてみるつもりだった。

しかし普段からあまり運動をしない僕には結構な事だ。

階段を登るだけで息があがるとは。

もう少しだ、とこゝ所で、一冊、本棚から階段へと落ちてゐるその本。

戻してあこゝ、と手にとつて何気なく開いたページに目をやる。

「何だ、これ…？」用意するのは魔方陣と鎧です、「

よく分からぬ記号やひだ埋め尽くされたその本で、唯一読める印本語の場所に目をやる。

円のような書かれているそれは魔方陣とやらなのだろうか。

「『有栖の国、不思議の国』って痛みえ！」

上から突如降つてきたそれ、何か、重くて冷たくて長い、これは…

…？

ふ、とそこで真っ白な靄が僕を包み込むかのように、ゆっくりと意識が途切れしていくのが分かつた。

古い紙のにおいかわって、甘い花の香。

すぐに意識を取り戻したように思つ。

眠つていたのなら感覚は当てにならないが、途切れたのはあの一瞬

だけ。そんな何の根拠もない感じがあった。

目を開けてまず視界に入ってきたのは、一面の花畠。
紫を基調としたそこは、まるでおとぎの国の世界のようだった。

「な……つー?」

止まつた思考回路のまま、取り合ひえず体を起こさうとして僕は『それ』に気付く。
体中にもまきついているそれ。

鈍く煌くそれは重い鎖だった。

「捕獲」

頭上短く小さな声がある。

「異世界によつて。 有栖」
「あじこいつ

にっこりと陽の光をあびて微笑むのは、僕よりいくつか年上だろう、
金髪碧眼。それこそ物語の中の王子様みたいな奴だった。

異世界では美形に注意しまじょう

「 まあ 行ひつか。 宇佐木うさぎが待ちくたびれてる。君が来るのをとても楽しみにしていたからね。遅くなれば僕がどやされる」

随分と饒舌な王子様だ。

さらさらと金の髪を靡かせて、僕には理解できない事をひたすらに話してくれる。

僕が聞いているかどうかなど関係ないとでもこいつかのようだ、それはもう一方的に。

「 それで、この変な世界に僕を呼んだのはあなたですか？」

面倒なことに巻き込まれそうな予感がする。

異世界に来て、それでいて美形に出会つところではない。

本を多く読んでいる僕に言わせてみれば、これから何かと戦えだが、お宝を探して来いだと、君は選ばれし者だーーとかそんな展開になりえない。

そうなる前に、つまく交渉してみよつ、面倒くせにこじつけめんだ。

「 何故そつ思ひづ？」

「 だつてあなたがこの王子様なんぢやないですか？」

「 まさか！ アハ、ハハハハ、この世界にそんなものはないよ、強いて詰つならば君がその存在に近い」

どうやら笑い上戻らしき。何をそんなに面白がるのかは分からぬが、僕の顔を見てはくすぐすと笑う。

「帰してくれませんか」

「それは無理」

きつぱりと即答されてしまう。

「僕の都合はどうなるんですか」

「そんなもの関係ないよ。君はただ座つていいだけだい」

「はあ？」

ただ座つてるだけ。

それだけの為に僕を呼んだのだとしたら迷惑な話だ。
僕は面倒な事も嫌いだが、退屈も嫌いなのだ。

何事も中間が一番。程よく適当に過ごせればそれがいい。

「それより、よく分かったね、ここが異世界だって。順応が早い
まるで値踏みするかのような無遠慮な視線。

「こんな広大な花畠はともかく、空まで紫だなんて僕の世界では在
り得ない」

「君が君の世界だよ」

にじじと有無を言わせぬ笑みで言られて有栖はぐつと言葉を飲み
込む。

「どうあえず、この鎖を解いてくれませんか」

言つた後で何故僕がこんな奴に敬語など使つてゐるのかと氣付く。

「それも無理」

「冗談じゃない」

「そう、文字通り、『冗談ではない』

こんなところにあと少しでも居たら君は死んでしまうし、僕は宇佐木ともう口も利いてもらえないくなる」

「ん、と微笑みそう言つと、そいつまじやらじやりと腕に巻きつけやたら重そうな鎖を解き、早口で何か呟く。

僕の知らない原語だった。

とたんに強い光に襲われて、僕は目を開けていられずにきつて目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6076d/>

不思議の国の有栖騎士

2010年10月28日08時40分発行